

柴田常恵資料の研究



大場博士資料の検索システムの開発に到達するまでの一連の作業は、他の蓄積資料についても応用することが可能で、これに基づいて柴田常恵氏の資料のデータ化を開始した。柴田氏の資料は文学部史学科の考古学研究室に所蔵されていたもので、写真アルバム47冊、手帳83冊、拓本資料およそ6,000枚、自筆原稿類約100冊、写真乾板等である。

47冊のアルバムには、県別に分けられ写真が収められているが、1つの県が複数のアルバムにわたっているものや、1冊のアルバムに複数の県が収められているものも多い。また、県別の分類に含まれなかったものについては、「雑」・「補遺」・「不明」として収められている。写真には、柴田氏の手による撮影のものと、第三者から譲り受けたと思われるものとの混在がみられる。被写体については、考古遺物や遺跡・仏像・寺院建築が大部分を占めており、それ以外のものは僅かである。また、必ずしも書式が統一されているわけではないが、写真の多くには、裏面等に撮影場所、撮影日時、対象物の種類・名称・由来等が記載されている。記載者については、筆跡から柴田氏自身と思われるものが多いが、それ以外の人物によると思われるものもある。

フィールドノートは、通し番号を付したラベルが貼付されている。これは、柴田氏が全国の遺跡や寺院等を調査した際に記録したものであり、その性格上、断片的なメモ書きや対象不明のスケッチなどが多く、解読するのが困難な部分が多く存在する。

拓本は、対象物ごとに分類して封筒に入れられ、その名称、採取した場所、日付等を記載した上で保管されている。

自筆原稿類・乾板等は、ほぼ未整理のまま保管されている。その中には、第一次世界大戦後、柴田氏がパラオに行った際の調査日記のようなノートもある。これには、調査の準備段階での出来事、船の中で見た島の絵、島々の通過月日・時刻、島の住人の様子や人数・男女比率などが、細部にわたって記載されている。

当事業では、まずこの中の写真資料についてデジタル化を行った。はじめに写真を全てスキャナーで取り込み、印刷やWeb公開といったさまざまな活用方法への対応を考慮して解像度600dpi・24bitRGBカラーのTIFF形式で保存した。次いで、この画像情報を、Web公開のため150dpi(長辺700ピクセル・JPEG形式)に圧縮する作業を行った。同時に、データのバックアップとしてハードディスクに保存した。写真には元々アルバム内での通し番号が付されていたが、電子情報化するにあたっては、扱いやすくするため県ごとに固有のファイル名と通し番号をつけて整理した。また、写真の裏や台紙等に記載されているメモ書きの読み取りを行い、写真の検索・整理等のために、アルバム上の通し番号・保存ファイル名の通し番号・写真の裏書の対照表を作成した。

成果の公開としては、写真資料のうちの約半数(2,733枚)にあたる東日本を中心に収めた『柴田常恵写真資料目録』を刊行した。残りの半数については、以後順次目録を発行し、大場博士資料と同様にデータ配信を実現する計画である。

柴田常恵氏は明治後期から昭和初期にかけて活躍した考古学者であり、文化財保護に大きく関わった人物でもある。よって、柴田氏の資料は考古学分野のみならず、広く文化財関連分野等の研究においても有用なもので、多方面より強い関心が示されている。当事業において、この中の画像資料についての再生保存が終わり、今後多くの活用が予測できる。

(田中秀典)